

【ねがいましては】

令和5年2月1日
第387号

KYOWA SCHOOL

「親子がひとつになる」

この半年近く、夕刊新聞が楽しみになっています。連載小説欄です。あらすじはというと、ある少年（高校生）が問題を起こし、補導委託（更生のため当該少年を他の家族が預かる）のため、ある受託者宅（少年を受け入れる家族）で生活し始める。少年は何が原因でそうなったかは、小説内でははじめのうちは語られません。しばらくして、突然母親が受託者宅へ押しかけます。「連れて帰ります・・・。」そこから徐々にそれまでの経緯がわかってきます。

少年の父は、かなりの苦勞の末に今を生きています。その苦勞を一人息子に味わせたくない一心で、中学受験をさせます。・・・失敗。少年は地元の中学へ幼なじみたちと通えることにほっとしますが、高校は両親の期待に応えようと懸命に勉強、希望通り合格。さらに大学へ向けて塾通い、その途中で塾へ遅刻しそうになり近くにあったボロボロの自転車を使い塾へ、途中警察官に職務質問され盗難自転車であることが発覚、しばらくしてそこへ駆けつけた父から、少年の話も聞かぬままきつく叱咤され、少年は父親への信頼がゼロへ、少年の両親に応えようとする必死な気持ちは結局伝わらず、そのまま少年の希望で補導委託処置へとすすみます。そこで親は条件として『委託先でもしっかりと塾からの課題をこなし、定期的に課題提出をする（郵送）こと』を提示。（一般的に補導委託の際に親が子へ条件を付けることはタブーだそうです）その後、委託先で会う人々たちとの触れ合いの中で少年は徐々に変化していきます。

そこへ突然母が迎えに現れます。少年のところに母は『父親の機嫌を損ねないように気を遣う』と映っていました。母は常に子の成績が悪い場合、「お前が悪い」と父親から責められていたようです。少年のところにひとつのかたが表れます。『母は僕のことを思ってくれてはいない。父の機嫌をとるためにふるまっている』

少年の『寂しさ』が強烈に感じられる瞬間です。ひとりぼっちです。今はそこまでなのですが、私が長年にわたり【ねがいましては】に訴え続けてきた、「教育を『競争至上主義』の中に入れてしまうことの危険性」を小説化しています。今後が楽しみです。

ここで考えさせられるのが『子の想い』です。子どもたちは何のために日々勉強しているのでしょうか。

・成績のため ・親のため ・自分のため ・叱られないため ・友だちのため ・おじいちゃん、おばあちゃんのため ・将来のため・・・様々です。ここまでの「・・・ため」は、学びが楽しいという気持ちがありません。

そして ・学びの楽しさを感じ取るため・・・これが私の追い求めている理想像です。そこには他人の存在がありません。自分だけの状態です。さらに学びの感受は生きようとする力を育みます。さらに先へ歩いていきたいという気持ちです。

そこで今一度立ち戻って考えることが『教育って何なのだろう』です。学校の目的です。

今までの【ねがいましては】に再三出てまいりました『灰谷健次郎の発言』集の中に語られていること。

『教育の目的は子どもたちの自立を助けることである。』です。『自明』だと言い切っています。でありながら・・・。

人は生来『くらべる』ことを常習化し生活しています。くらべるは競うことにつながります。常に優劣がつきまとい、その日その日の勝ち負けに一喜一憂し、常に自らの位置を気にしながら生活しています。

子どもたちの自立とは、やがてやってくる親元からの旅立ちの後にも力強く厳しい現実の中で生き抜くこと。何が何でも生きてやるぞという気概を手にする事。

学びの中には色とりどり、山あり谷あり、「イヤー楽しいぞ！ いやしかしこれはなんだ？ あれ、もう3時間も考えている。いや、もう3日も考えている。まだわからない・・・でもなんとかして・・・。」

失敗の連続、でもなんとかしてやろうと続ける。この心理は過去に学びの楽しさを味わった経験の有無でかなりの差を生じるのではないのでしょうか。自ら向かって達成した瞬間の喜びです。ただやらされてきただけの人生の中には受け取ることの出来ない気持ちだと思います。

自分から発想して動く。言われたから動く。この二つには、天と地の違いがあると思います。単純に現教育制度を俯瞰視した場合、答えは明白です。この変えたくても変えられない現状に私は立ち向かい続けるつもりです。訴え続けたいと思います。

夕刊紙のこれからが楽しみです。

親は常に子の心理をくみ取ってあげることが大切です。けっして親の名誉や虚栄心のために感情を子にぶつけてはならないことはよくご存じだと思います。しかし現実、前回の成績と比較し、下がった場合、上がった場合、どのような感情を抱かれますか。すでに比べています。比較検討は確かに大切なことかもしれませんが、もし比べるのであれば、お子さんのところが立ち止まってしまったのか、それとも歩み続けていたのか。それだけでいいのだと思っています。

もしお子さんのところが止まったままだったら、すぐに寄り添うことです。子のところのとなりにおいてあげることです。いつも一緒だよ！ そうだいっしょに旅しよう！ 出かけよう！ たまには親公認でずる休みだっいいじゃないか！ 子にとっての「しあわせ」は子自身が決めるものです。